

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 29 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520801

研究課題名(和文) 出土資料とくに貨幣資料に基づく古代アフガニスタン史の再検討

研究課題名(英文) Reconsidering the Ancient History of Afghanistan Based on the Numismatic Evidences

研究代表者

稲葉 稯 (Inaba, Minoru)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：60201935

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：古代アフガニスタン由来の貨幣資料について、欧米所蔵の資料調査および最新の研究状況の把握につとめ、イスラム化前夜から初期イスラム時代の同地域の歴史を、貨幣と文献資料に基づいて再構成することに一定程度成功した。その成果は、邦文で執筆された二本の論文に示した。また国外の学会に積極的に参加し、多くの研究報告を行った。また、2013年にはアフガニスタン、オーストリア、イタリアから8名の研究者を招聘し、国際共同研究イベント Kyoto Afghan Week 2013を開催し、公開講演会、共同ワークショップ、博物館実習などを通じて国際共同研究の新しい道を開いた。

研究成果の概要(英文)：The research project aimed at surveying relevant coins stored in European and American museums, as well as following up the latest research topics and trends in the numismatic studies of ancient Afghanistan. Through the two articles written in Japanese, it has been achieved to some extent to reconstruct the history of pre- and early Islamic period of the region. Also by reading papers at various conferences and symposia held abroad, the outcomes have been made public. In autumn 2013, the joint research event entitled "Kyoto Afghan Week 2013" was held inviting eight researchers from Afghanistan, Austria, and Italy. Not only public lectures but the on-site workshops at museums have opened a new path toward the further international collaborative works.

研究分野：人文学

キーワード：アフガニスタン 中央アジア史 貨幣学 イスラム史 考古学

1. 研究開始当初の背景

現在のアフガニスタン地域はすでに三十年余の混乱の中にあり、その行く末は未だ不透明なままである。このような混乱の背景として、当該地域の有する複雑な歴史と文化のあり方があることは夙に指摘されているが、18世紀後半のアフガニスタン王国成立以前の時代、特に古代～中世史に関しては、その歴史像が断片的にしか明らかにされていない。一方で1990年代以降、アフガニスタンからは幾つかの画期的な発見がもたらされた。クシャーン朝の王統史にとって極めて重要な情報を持つバクトリア語ラバタク碑文(N. Sims-Williams & J. Cribb, "A New Bactrian Inscription of Kanishka the Great. *Silk Road Art and Archaeology* 4, 1996)、アフガニスタン北部の古代から中世の社会経済に関するはじめてのまとまった資料であるバクトリア語世俗文書群(N. Sims-Williams, *Bactrian Documents from Northern Afghanistan I: Legal and Economic Documents*. Oxford, 2000; *Bactrian Documents from Northern Afghanistan II: Letters and Buddhist Texts*. London, 2007)、あるいは2000年代に入ってカーブル近辺で新たに発見された幾つかの仏教寺院(Z. Paiman, *Afghanistan: Nouveaux monuments bouddhiques*, *Archéologia*, 430, 2006)などがそれであるが、この20年間の間に飛躍的に事例数が増加した貨幣資料は、それらにも増して重要な資料である。そもそもアフガニスタンの歴史、特に古代から中世の歴史に関わる貨幣資料は、古くからヨーロッパの蒐集家達の手で少しずつ集められていたが、19世紀前半、チャールズ・マッソンが八万枚とも言われる大量のコレクションをアフガニスタンからイギリスへ持ち帰ったことで一気に注目を集めた(H. H. Wilson, *Ariana Antiqua*, London, 1841; E. Errington, *Ancient Afghanistan through the Eyes of Charles Masson (1800-1853)*, *Institute for International Asian Studies Newsletter* 27, 2002)。しかしながら、前世紀半ばまではこれらの貨幣は主として蒐集家達の非公開のコレクションに属し、学術的研究材料として広く用いられることはなかった。1960年代、ウィーンの貨幣研究家ロベルト・ゲブルは1500点以上におよぶ貨幣を詳細に分析検討し、貨幣を主たる材料としてアフガニスタンの4世紀から8世紀の歴史を再構成した記念碑的研究を公刊した(R. Göbl, *Dokumente zur Geschichte der Iranischen Hunnen*, Wiesbaden, 1967)。その後、特に1980年代以降、各地の博物館に散在する資料や、個人蒐集家の所有貨幣を広く調査し、科学的手続きをもって学術的研究対象とする研究が現れ始める。この時期はまた1930年代以降にフランス・アフガニスタン考古調査団(DAFA)の調査によって発見された出土貨幣資料の分析が進んだ時期にもあたり、公開される貨幣資料の点数も飛躍的に増大した。かくしてアフガニスタンおよび周辺地域由来の古代・中世貨幣研究は当該地域・時代の歴史研究の主要な柱となるまでに至ったのである

(M. Alram, Alchon und Nezak: Zur Geschichte der iranischen Hunnen in Mittelasien, *La Persia e l'Asie central da Alessandro al X secolo*, Rome, 1996 参照)。現在ウィーン美術史美術館貨幣部門が作成中のアフガニスタン由来の古代・中世貨幣データベースはすでに2万を越える資料を含み、その数はさらに増加中である。

ひるがえって我が国における当該分野の研究はこれまでごくごく僅かしか行われてこなかった(例外的なものとして、桑山正進「6-8世紀 Kapisi-Kabul-Zabul の貨幣と発行者」『東方学報』京都 65 冊, 1993 年; 津村真輝子他『新疆出土サーサーン式銀貨』シルクロード学研究センター, 2003 年がある)。研究対象となる貨幣そのものが我が国にはほとんど存在しなかったこと、上記のような学術研究としての貨幣学そのものが十分に育っていないこと、などがその理由であると考えられる。しかしながら、いくつかの博物館が近年これらの貨幣を収蔵するようになってきていることや、インターネットなどを通じて貨幣の画像が簡単に参照できるようになってきたことを勘案するなら、今後我が国においても、貨幣研究とその成果の歴史研究への統合を精力的に進めなければならないことは明らかである。

ただし、注意すべきはそのような資料の多くは現在、正式の考古学的発掘を経たものではなく、オークション等に売りに出されるという形で存在が明らかになってきていることである。このことはすなわち、それぞれの貨幣の信頼できる出土状況情報が欠けているということの意味し、結果としてそれらの研究は様式論と分類学の手法を採らざるをえない。そのような状況で研究を行うためには信頼できる貨幣研究者との研究連携のもと、これを歴史研究の材料として利用可能にするという手続きが必要になる。申請者はこれまで、アフガニスタン地域の古代・中世史の研究を進める中で、様々な形でヨーロッパの貨幣研究者、特に当該地域・時代の貨幣研究の中心であるウィーン美術史美術館の研究者と交流をもち、共同研究の成果を発表してきた(M. Alram, D. Klimburg-Salter, M. Inaba, & M. Pfisterer (eds.), *Coins, Art and Chronology II: Indo-Iranian Borderland in the First Millennium CE*, Vienna, 2010)。今回の研究においては、これら海外の貨幣研究者とのこれまでの協力関係を最大限に活用すべく、ウィーン美術史美術館貨幣部門主任学芸員 Michael Alram 博士、同学芸員、Klaus Vondrovec 博士、Matthias Pfisterer 博士に海外研究協力者となることを依頼した。

また、申請者のこれまでの研究は、主に文献や出土資料に基づいて当該地域・時代の歴史地理を解明する方向へと進められてきたが(稲葉穰「アフガニスタンにおけるハラジュの王国」『東方学報』京都 76 冊, 2004; 同「8世紀前半のカーブルと中央アジア」『東洋史研究』69-1, 2010; 同「泥孰攷」『東方学

報』京都 85 冊, 2010 などを参照)、今回の研究においてその成果を貨幣研究と有機的に統合することを目指した。

2. 研究の目的

本研究において具体的に目標とするのは、ヨーロッパの各博物館や美術館(特にイギリス、フランス、ドイツ、オーストリア)に所蔵される貨幣の実地調査、および貨幣の展示会カタログ、オークション・カタログ等からの情報収集を行い、専門の貨幣学者との協働のもと、西暦 5 世紀から 11 世紀に至る時期のアフガニスタン東部・北部のできるだけ詳細な歴史的地図を作成することである。上にも述べたように、現在存在が知られている当該時代の貨幣の多くは、美術史的様式論と貨幣の質量分析による分類の視点から研究されているが、それらを具体的な歴史文脈の中に位置付け、どの貨幣がいつの時代のどのような人物によって発行されたのかという点を文献資料その他と照合しつつ、一つ一つ明らかにし、ほとんど詳細な歴史がわかっていない、この地域のイスラーム時代前夜の状況を視覚化することを目指す。また、可能であれば一定量の数を持つタイプの貨幣について、数量的分析を行い、そこから社会経済状況の解明につながる糸口を得る。

3. 研究の方法

具体的研究方法としては、①ヨーロッパの博物館・美術館・研究機関に所蔵されている貨幣を調査する、②研究文献の収集と再調査、③画像資料の蒐集の三つの柱を設定する。①についてはウィーン美術史美術館コレクションを中心に、大英博物館コレクション、メトロポリタン美術館コレクション、および可能であればフランス、ドイツの貨幣コレクションを実地調査し、それぞれの研究現場を把握する。②については従来の貨幣研究文献を蒐集調査し、とくにゲブルの研究(1960年代)以降、どのような研究がどの領域において行われ、新たにどんな貨幣が知られるようになったかを把握することを目的とする。③については各美術館のカタログ等の他、それぞれの研究機関が作成しつつあるデータベースの利用可能性の調査も行う。さらに最終的には以上の研究の総括として、国際シンポジウムを開催し、貨幣資料を中心とする古代アフガニスタン史研究の最前線を了解することを目指す。

4. 研究成果

研究成果としてはおおよそ以下の3つに分けて記述することができる。

(1) 美術館・博物館の調査

2012年11月、オーストリア科学アカデミーに招聘された機会を利用して、美術史美術館の貨幣資料を調査し、同時に同館学芸員 Vondrovec 博士、Pfisterer 博士と研究打ち合

わせを行った。これらの成果は、6世紀以前のアフガニスタン、北インドの貨幣に関する両博士の近年の画期的研究の出版にも生かされている(M. Pfisterer, *Hunnen in Indien*, Vienna, 2014; K. Vondrovec, *Coinage of the Iranian Huns and their Successors from Bactria to Gandhara (4th to 8th century CE)*, Vienna, 2014)。

2013年3月にはイギリス、セント・アンドリュース大学で開催された学会(Eastern Iran and)に参加した機会を利用し、ロンドンにて大英博物館貨幣部門所蔵の貨幣コレクションを調査し、同時に同部門学芸員の E. Errington 博士と研究打ち合わせを行った。Errington 博士は Masson コレクションと通称される、19世紀にアフガニスタンから将来された貨幣群の研究を長年続けてきたが、その成果は大英博物館のウェブサイトにてデータベースとして掲載されることとなった。

2013年10月にはニューヨーク、メトロポリタン美術館の南アジア、中央アジア関連資料の調査を行い、同美術館学芸員 K. Behrendt 博士と、インドの図像資料の中央アジア伝播と遊牧民の関連に関する研究討議を行った。

さらに古代アフガニスタンの歴史地理に関連する調査として、2014年12月には、明代中国で作成された思しきペルシア語地理書写本を求めて国立台湾大学図書館を訪れたが、70年前に所在が報告されていた同写本が現在行方不明になっていることが明らかとなった。

(2) 研究文献資料の精査と画像資料の蒐集

この面においては、ウィーン美術史美術館の Vondrovec 博士による包括的研究(上掲)が2014年に出版され、1960年代以降に知られるようになった貨幣のほぼ全てが網羅され、さらにそれらが研究史とともに詳細に分析されるようになったことにより、参照が極めて勘弁となった。私も同書に対して歴史地図を提供し、あるいは歴史的経緯に関する記述のアドヴァイスを行うなどして、一定の貢献を行い得たと考える。自分自身の研究ではないが、学会を大いに裨益する研究成果に参与できたことは大きな収穫であった。

(3) 国際共同研究

研究期間においては積極的に海外の学会、シンポジウム、講演会などに参加し、研究成果を発信するとともに、関連分野の研究者たちと情報交換を行うことができた。

まず2012年11月、オーストリア科学アカデミーの招聘を受け、シンポジウム *Envisioning History—New Interpretative Models* においてこれまでのウィーン大学と京都大学の共同研究の成果に関する報告を行った。

ついで2013年3月にはイギリス、セント・アンドリュース大学で開催された国際学会 *Eastern Iran and Transoxiana 750-1150* に招待され、とくに初期イスラーム時代の貨幣を用いた歴史地理的研究に関する報告を行った。

さらに2013年4月、アメリカ合衆国ノートル・ダム大学で開催された国際学会 *Civilizational Formation: The Carolingian and 'Abbasid Eras* に招待され、初期イスラーム時代のアフガニスタン史に関する報告を行った。

また2013年10月にニューヨークに調査に赴いた折には、ニューヨーク大学古代学研究所月例研究会に招かれ、前イスラーム時代のアフガニスタンに関する短い報告をした。

国外の研究者を京都に招いての国際シンポジウムに関してはこれを研究期間の最終年度に開催する予定であったが、招待予定者の都合により、一年前倒して2013年11月末に一週間にわたる共同研究イベント *Kyoto Afghan Week 2013* を開催した。前半三日間は公開講演会とワークショップを行ったが、その内容と参加者は以下の通りである。

2013年11月26日

公開講演会

- “Past activities and future plans of the National Museum of Afghanistan,” Omara Khan Masoudi (アフガニスタン国立博物館館長)
- “Revivifying the past: Archaeological documentation and art historical reconstruction of pre-Islamic Afghanistan”, Anna Filigenzi (オーストリア科学アカデミー)

ワークショップ

- 「アフガニスタンおよび隣接地域の考古学」 Nasrin Belali (アフガニスタン国立博物館)、岩井俊平 (龍谷大学龍谷ミュージアム)、内記理 (京都大学文化財総合研究センター)

2013年11月27日

公開講演会

- “Mes Aynak and Tepe Narenj: A revised chronology for the region of Kapisa-Kabul”, Deborah Klimburg-Salter (ウィーン大学芸術史研究所教授)
- “Genres of Chinese Buddhist translations as reflecting or not-reflecting historical developments in India” 船山徹 (京都大学人文科学研究所教授)

2013年11月28日

公開講演会

- “Coins and people across the Hindukush” Michael Alram (ウィーン美術史美術館主任学芸員)
- “Kapisi-Kabul-Ghazni: Historical shifts of the regional center in pre-modern eastern Afghanistan” 稲葉穰 (京都大学人文科学研究所教授)

ワークショップ

- 「アフガニスタンおよび隣接地域の貨幣・美術・歴史」 Nikolaus Schindel (オーストリア科学アカデミー研究員), 影

山悦子 (関西大学研究員), Erika Forte (北京大学研究員), 稲葉穰

このシンポジウムで報告された論文は一部、京都大学人文科学研究所の紀要『東方学報』に掲載され、また一部は『アジアの仏教美術』(中央公論美術出版)に翻訳されて掲載されることになっている。さらに、講演会、ワークショップの他に奈良国立博物館、龍谷ミュージアム、MIHO ミュージアムにおいて博物館見学と研修を実施した。

最後に2014年3月、オクスフォード大学東洋学部准教授 L. Treadwell 博士を招聘し、氏が進めている初期イスラーム時代の貨幣研究について、*Dirhams for Slaves, Furs and Amber: Islamic trade with Europe and the northern lands in the 9th and 10th centuries* (3月18日、京都大学人文科学研究所)、*Early Islamic kings: When, where and why did kings first appear in the early Islamic world?* (3月21日、東京大学東洋文化研究所)で二度の公開講演会を開催するとともに、今後の研究協力体制について打ち合わせを行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① Minoru INABA, “Sedentary Rulers on the Move: The Travels of the Early Ghaznavid Sultans”, in: D. Durand-Guédy, *Turko-Mongol Rulers, Cities and City Life*, Leiden: Brill, 査読有, 2013, pp. 75-98.
- ② 稲葉穰 「前近代のカーブル：東部アフガニスタンにおける大都市の変遷」『東方学報』京都 88 冊, 査読有, 2013, pp. 359-402.
- ③ 稲葉穰、「8-10世紀ヒンドゥークシュの南北」、『西南アジア研究』79, 査読有, 2013, pp.1-27.

[学会発表] (計7件)

- ① Minoru INABA, “On the Vienna-Kyoto Research Collaborations”, *Envisioning History—New Interpretative Models*, 2012年11月29日、ウィーン大学 (オーストリア)
- ② Minoru INABA, “Across the Hindukush of the Early Islamic Period”, *Eastern Iran and Transoxiana 750-1150: Persianate culture and Islamic civilization*, 2013年3月8日、セント・アンドリュース大学 (連合王国)
- ③ Minoru INABA, “The Frontier After the ‘Abbasid Break-up: The 10th Century East”, *Civilizational Formation: The Carolingian and*

'Abbasid Eras, 2013年4月14日、ノートル・ダム大学 (アメリカ合衆国)

- ④ Minoru INABA, "Kapisi-Kabul-Ghazni: Historical shifts of the regional center in pre-modern eastern Afghanistan", *Exploring the Past and Envisaging the Future*, 2013年11月28日、京都大学人文科学研究所 (京都市)
- ⑤ Minoru INABA, "From Caojuzha to Ghazna: Early Medieval Chinese and Muslim Descriptions of Eastern Afghanistan", *Chinese and Asian Geographical and Cartographical Views on Central Asia and its Adjacent Regions*, 2014年1月10日、ボン大学 (ドイツ連邦共和国)
- ⑥ 稲葉穰「フーナとエフタル再考：北西インドの中央アジア系政権に関する最近の研究について」『前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討』, 2014年3月29日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (文京区)
- ⑦ 稲葉穰「旅行記・道・フロンティア：歴史のアフガニスタンをめぐって」『旅行記史料が結ぶ近世アジアとムスリムの世界像』2014年7月6日、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科(京都市)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

稲葉穰 (INABA MINORU)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：60201935

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：